

世間の心を開く光

ルカ2:22~40 / 李正雨師

ほとんどの本の冒頭には、著者が語りたい言葉が書いてあります。それで、本の冒頭をよく読めば、本の意図をある程度は把握することができます。ルカによる福音書も同じだと思います。ルカによる福音書1章と2章では、著者の意図が明らかに示されています。先週の説教で、私はルカによる福音書1章の「マリアの賛美」を取り上げました。そして皆様に、この賛美を通して、ルカによる福音書のメシアが誰のために来られたメシアかについて申し上げました。ルカによる福音書のメシアは、私たちのような平凡な人々のために来られたメシアです。いや、もしかすると、私たちよりも貧しい人、弱い人、身分の低い人のために来られたメシアを語っているのかもしれませんが。ですから、マリアは「権威ある者をその座から引き下ろし、身分の低い者を高く上げ、飢えた人をよい物で満たし、富める者を空腹のまま追い返されます(52~53節)」と賛美していると思います。

このような考え方は、ルカによる福音書の全般にわたって現れています。先週、福音書に登場した羊飼いたちも身分が低く、人々に無視される人たちでした。しかし彼らは、天使からイエス様の降誕告知を聞き、彼らによってメシアの誕生が知らされました。羊飼いがメシアの使者になったのです。そして、今日の福音書も同じ観点を持っています。今日の福音書に登場している人々も、非常に平凡な人々です。しかし、彼らに啓示が与えられ、彼らの口を通してメシアの降誕が人々に知らされます。有名な人、力のある人ではなく、私たちの周りでいつも会っている人、もしかしてかわいそうと思われる人々がメシアの臨在を知らせているのです。今日の福音書は、このことがイエス様の清めの期間に起こったと語っています。22節の言葉です。「さて、モーセの律法に定められた彼らの清めの期間が過ぎたとき、両親はその子を主に献げるため、エルサレムに連れて行った。」

レビ記12章によると、女性のユダヤ人たちは、出産をした後、40日が過ぎると、エルサレムの神殿に来て自分の清めのために、いけにえを捧げなければなりません。また、律法に「初めて生まれた男子は皆、主のために聖別される」と書いてあるので、ヨセフとマリアは清めの期間に、幼子イエスを神様にささげるためにエルサレムに行ったのです。一般的に男の子は、生まれてから8日目に割礼を受け、40日後に清めの儀式を行い、女の子は80日後に清めの儀式を行ったそうです。そしてこの清めの儀式では、通常、子羊一匹と鳩一羽が捧げ物として使われました。しかし、暮らし向きが良くない場合は、山鳩一つがいか、家鳩のひな二羽をいけにえとして捧げます。今日の福音書の24節には、イエスさまの両親は、「山鳩一つがいか、家鳩のひな二羽をいけにえとしてささげるためであった」と書いてあります。つまりイエスさまの家の都合も良い方ではなかったということでしょう。そしてイエス様の両親は、清めの儀式を行うために行ったエルサレム神殿でシメオンという人と出会います。25~26節です。「そのとき、エルサレムにシメオンという人がいた。この人は正しい人で信仰があつく、イスラエルの慰められるのを待ち望み、聖霊が彼にとどまっていた。そして、主が遣わすメシアに会うまでは決して死なない、とのお告げを聖霊から受けていた。」

聖書は、シメオンについて正しい人で、信仰があつく、聖霊が彼にとどまっている人だと記しています。私は、これが神様が人を判断する基準だと思います。その人が力があるのか、高い地位を持っているのかではなく、正しい人なのか、信仰があついのかが神様の判断の基準なのです。そしてこのような基準によって神様はこの世を導かれると思います。それで、ルカによる福音書はこういう基準に合う人、シメオンを登場させます。世の基準には合わない人かもしれませんが、神様の基準には十分な人だからです。

イエス様の両親は、エルサレム神殿でシメオンと出会います。出会った場所が神殿だったので、一部の人は、このシメオンを祭司長だと思っています。さらに、シメオンがイエス様を腕に抱いて神をたたえた

ので、シメオンは祭司長だと思っているかもしれません。しかし、シメオンとイエスさまの両親が出会ったところは、神殿の境内であり、この場所は誰でも入ることができる場所でした。又は、シメオンについての紹介でも、祭司長という言葉は付いていません。すなわち、シメオンは祭司長だということより、神殿の境内に入ってきたお年寄りの普通の人だった可能性が高いです。でも、聖霊は、この平凡なおじいさんと共におられ、多くの人々の中でメシアを認識することができるようにさせました。それで彼は、このメシアを抱いて賛美することができました。この賛美が私たちの教会の式文にある「ヌンク・ディミティス、シメオンの歌」です。歌詞だけを私が読んでみます。「今わたしは主の救いを見ました。主よ、あなたはみことばのとおり、しもべをやすらかに去らせてくださいます。このすくいはもろもろの民のために、お備えになられたもの、異邦人のこころをひらく光、み民イスラエルの栄光です。」

シメオンはイエス様の誕生が「異邦人のこころをひらく光、み民イスラエルの栄光」と賛美します。イエス様の誕生によって、この世の人々には、光が照らされ始めます。この光によって、人々は神様の言葉と義について分かるようになります。何が正しいか、何が神の御心なが分かるようになるということです。しかし、皆がこの光を喜んで受け入れるわけではありません。むしろ人々は、この光を気まずく思うこともあるでしょう。自分たちの望む光、この世の基準ではないからです。34節でシメオンは、イエス様がどのような人物になるかを預言します。イエス様は、イスラエルの多くの人を倒したり立ち上がらせたりして、反対を受けるしるしになるのです。マリアもこのことによって心に大きな傷を受けるのです。なぜなら、このことによって、多くの人々の心にある思いが現れ、イエス様は排斥されることになるからです。有名になることを願い、偉くなることを願い、支配することを願っている人間の欲望がイエス様によって現れることになるのです。だから、この世の基準を求め、肉の平安を求める者は、イエス様を受け入れないでしょう。36節以下のアンナの登場もこれと関係があります。今日の福音書36～37節です。「また、アシェル族のファヌエルの娘で、アンナという女預言者がいた。非常に年をとって、若いとき嫁いであら七年間夫と共に暮らしたが、夫に死に別れ、八十四歳になっていた。彼女は神殿を離れず、断食したり祈ったりして、夜も昼も神に仕えていたが、」

アンナについての説明の中で、目立つことがあります。それはアンナがアシェル族の人であること、女預言者であること、やもめであることです。ソロモン王以降、イスラエルは二つの国に分かれます。北イスラエルと南ユダに分かれた彼らは、互いに戦争することもありました。この両方の中で、いわゆる、正統と言えるダビデの家を受け継いだ国は、南ユダでした。そして、イエス様の時代のエルサレムの神殿は、南ユダの神殿でした。ところが、その場所でイエス様はアシェル族、つまり北イスラエルの女預言者によって人々に知られます。さらに、アンナはやもめでした。やもめもやはり、羊飼いのように人々に認められない人でした。貧しくて、助けを受ける対象でした。ところが、このような人々によってイエス様の誕生はお祝いを受け、知られ始めました。

ルカによる福音書は、イエス様の誕生に羊飼い、平凡なおじいさん、やもめのおばあさんを登場させます。そして彼らを通して、イエス様の誕生をこの世に知らせます。一般的に、偉大な人の誕生には、偉大な人々のお祝がついて来ます。しかし、イエス様の誕生には、そんな偉大な人々は登場しません。力がなくて、貧しくて、平凡な人々、しかし、神様の御心を求め、正しさを求める人々が登場しました。これは、神様の救いが誰に臨んでいるのかを示すことだと思います。この救いが私たちの心を開き、私たちの光になりました。そして、この救いがこの世の心を開く光になるのだと私たちは信じています。これを信じて従っておられる皆様に、真の平安がありますように。イエス様の降誕の喜びが平凡な人々と共にありますように、主の御名によって祈ります。アーメン